



安藤 直人さん

あんどう・なあと

1950年東京都生まれ。東京大学農学部林産学科卒、同大学院修士課程修了。農学博士。東京大学大学院特任教授、東京大学名誉教授。

木でつくられた住まいは、
日本人のDNAに
深く根ざしたものです。

木

時を刻む住まい 和を大切に作る住まい

工業化の20世紀が終わって、環境の時代が意識され、時を刻む材料がよいという評価に変わってくると思います。和の住まいには、木がある、土がある、草がある、紙がある。そういう時を刻める材料の集合体で、

工夫されたものだと思えることができてくるでしょう。

木を含めたこれらの自然の素材は、見た目や匂い、肌触りなど、おいに五感を刺激するところがあります。人間は高感度なセンサーを持

っているから、敏感に感じ取るので。さらに言えば、日本人に脈々と続くDNAというような部分が、素直に受け入れる材料なのです。

木はそれほどすぐには傷みません。ただ色は変わります。それは、汚れるわけではなく、「味がつく」のです。外壁に使うと当初は雨がかかってムラだらけになります。一樣な色になるのに20年程はかかります。

「昔のもの、古いものはいいなあ」と感じるのは、ムラを通り越した後姿を見ていいと思っているわけなんです。だから、変化を待つのです。

一樣に変化するためには、手入れをしていく仕組みを整えたり、使う人にライフスタイルとして手入れやその重要性を教えないといけないかもしれません。住まい方の技術といってもよいかもしれません。

ただ、今の若い人たちは「スローライフ」と言い方を替えて、こうしたことを理解するようになってきている。これには希望が持てますね。

「人の和」を育む住まい

今の日本は、生活習慣の洋風化に

伴って個人主義がはびこり、同じ一軒屋根の下に住んでいても家族はバラバラです。それぞれが個室にこもって関係を絶ち、テレビを見たりゲームで遊んだりしています。

一方、昔は障子や襖で部屋を仕切ることによって一定のプライバシーを確保していましたが、隣室の気配を感じることができました。昔の家では、家族が「緩やかに繋がっている」という安心感を自然に持つことができたのです。

また、しつらえについてもそうですね。今は床の間がなくなり、掛け軸を掛けたり、人を迎えるために花を生ける習慣がなくなりました。しつらえというのは、自分のためにやっているわけではなくて、相手を思う気持ちです。

「和の住まい」とは、家族はもちろんお客との関係性、つまり調和、仲良くする意味の「和」でもありません。これは、全体的なバランスがないと納まりません。家を一歩出ると、和は向こう三軒両隣、ご近所、そして集落、村へと広がっています。これこそ日本の生活だと思おうです。

戸外

坪庭・中庭

つぼにわ・なかにわ

坪庭や中庭は、かつての町家によく見られ、採光・通風・鑑賞などを目的として設ける、建物に囲まれた小さな庭を言います。



3方の部屋から眺められる緑豊かな中庭 (写真: ②)



玄関の正面に坪庭を設けることで、明るく開放的な玄関を演出 (写真: ①)

戸外

植栽

しょくさい

植栽は、鑑賞や修景以外に、日射遮蔽・防風・材木・食料（果実等）・燃料（薪）等の確保など様々な目的で植えられます。



住宅のアプローチや境界部の植栽。地域の景観向上にも貢献 (写真: ①)



日射遮蔽のためのよしずの役割を担う、つる性植物による緑のカーテン (写真: ⑦)

戸外

前庭

まえにわ

民家の前庭は、人を迎える導入のスペースであるとともに、地域のコミュニティに開放され、半公共的な機能をもたせることもありました。



伝統的な民家における落ち着いた趣の前庭 (写真: ①)



日中は遊び場にもなる住宅アプローチ部分の駐車場スペース (写真: ①)

配置

建物配置

たてものはいち

建物の配置の工夫により、季節風に対応したり、密集市街地の採光・通風を向上させることができます。



風の弱い東に向けて建つアズマダチ、西側には屋敷林（カイニヨ）を植樹（富山）



町家の坪庭の配置を近隣と協調することで、採光や通風を確保し合う

装い

囲炉裏

いろり

住宅内の床面を切り下げてつくられた炉で、調理・食事、採暖のために設けられます。最近では囲炉裏は少なくなりましたが、火を利用する例として、炉を組んだ座卓、薪ストーブなどがみられます。



周縁部にものを置ける板をまわした囲炉裏 (写真: ①)



リビングに薪ストーブを設けた例。吹抜けて上階と連続する家族中心の場 (写真: ①)

素材

土壁

つちかべ

土壁とは、^{こまい}小舞と呼ばれる竹や木で組んだ格子を下地とし、土を塗り重ねた壁を言います。日本の伝統的な壁工法で、仕上げには漆喰や聚楽土などが用いられます。



小舞を組み、何層にも土を塗り重ねてつくる



土壁の風合いを生かしたインテリア (写真: ①)

素材

自然素材 地域産材

しぜんそざい ちいきさんざい

住宅に使われる自然素材には、木・紙・土・石・竹など様々なものがあります。住宅を建てる地域で調達される材料は地域産材と呼びます。



地域材 (金山杉) と漆喰、畳、和紙などの自然素材でつくる健康的な住まい (写真: ⑥)



地域に残る民家を改修した住まい。自然素材を多用 (写真: ⑥)

戸外

濡れ縁

ぬれえん

濡れ縁とは、建物の外部に設けられる雨ざらしの縁側で、木板や竹などでつくられました。現代のウッドデッキ同様、室内の延長として利用できます。



室内から濡れ縁、外部に至るつながり (写真: ①)



深い軒下に設けられた濡れ縁 (ウッドデッキ)。室内の延長として空間に広がりを与える (写真: ②)

内部意匠 真壁

しんかべ

柱や梁などの構造材を表に見せる壁のつくり方を言い、構造材以外の部分は土壁や面材を下地とし、塗り壁・壁紙などで仕上げます。構造材を見せない大壁に比べ、構造材の状態が容易に分かります。



落ち着きと温かみを持たせた真壁の部屋を洋間として使用



真壁と障子の意匠によりダイニングと和室を一体感のある雰囲気につらえる（写真：①）

内部意匠 大黒柱

だいこくばしら

大黒柱は、元来民家の平面の中央付近の構造上重要な太い柱で、家格の象徴として設けられました。最近でも家族やその集いの象徴する太い柱を「大黒柱」としてリビング等に設ける例も見られます。



土間と座敷の間の大黒柱。畳を切り欠かないよう敷居位置をずらしている（写真：①）



板の間における大黒柱。吹抜けと組み合わせられ、視覚的に2階にもつながる（写真：①）

装い 床の間

とこのま

座敷の床の間は、構成要素や形式が決まっていますが、最近では自由な発想の床の間や花や季節のものを飾る場所を、様々に工夫して設ける事例が増えています。



定型に近い床の間（写真：①）



玄関の正面に床の間風の飾り棚が設けられている（写真：①）

装い 仏壇・神棚

ぶつだん・かみだな

住まいの中の礼拝及び祖先を祀るスペースであり、家族の大切な思い出を顧みる場でもあります。住まいの中にこうした場を設ける日本の文化です。



リビングに連続する和室に仏壇を設えた例（写真：①）



押入上部に神棚を設置。神棚は壁面からの持ち出しが多いが、専用スペースを確保（写真：①）

内部空間

吹き抜け

ふきぬけ

上下の2つの階にまたがる天井の高い空間を言います。上下階のつながりや、空気の循環をうながします。



京町家における通り土間の吹き抜け。採光と換気の機能を担っている



吹き抜けを介して家全体がひとつながりで一体感を感じられる

ゆか

畳(和室)

たたみ わしつ

畳は日本の住まい、和室を象徴する床の仕上げ材です。元来、心材(畳床)は稲わら、表面材(畳表)はい草を材料としてつくられた、調湿性能のある自然素材です。



2面が板の間に面した畳の間。間仕切りの障子は3/4開放でき、一体感、連続性が大きい(写真:①)



半畳縁なしの畳はニュートラルな雰囲気で、洋間的な用途にも使いやすい(写真:①)

ゆか

板の間

いたのみ

木板を張った床で、樹種、板厚、板の巾及び塗装の種類等は様々です。無垢板は柔らかく、温かみのある触感です。



温かみのある樹種を用い、椅子座と床座の生活を両立する空間をつくる事が可能(写真:①)



塗装の種類、色によっては光を柔らかく反射して、部屋全体を明るくする(写真:①)

ゆか

土間

どま

土間は、元来、土や三和土^{たたき}などで仕上げられた床で、現代ではタイル、瓦などを敷き込むこともあります。室内空間ですが、戸外的利用も含め多用途に利用できます。



玄関から連続する土間スペース。自転車の収納やおしゃべり等多様な趣味空間を形成(写真:①)



集合住宅でバルコニーに面するリビングの一部を土間にした例(写真:①)

内部建具

欄間

らんま

建具上枠（鴨居）と天井の間に設ける建具や飾りを言います。元来は襖、障子上部のものものことでしたが、最近では洋間の開き戸の上部に設ける例も見られます。



伝統的な民家における襖上部の伝統的な欄間（写真：①）



通風を確保するため開閉機能を持つ欄間（写真：①）

内部空間

続き間

つづきま

続き間は、本来、襖で仕切られた和室二間で、襖を外せば広間として使えます。現代の和室と洋室をつなぐものも、ここでは合めて扱います。



和室二間を襖で仕切った続き間（写真：⑥）



板の間のうち畳の間に面する部分のみ畳敷きとし、連続性を高めた例（写真：①）

内部空間

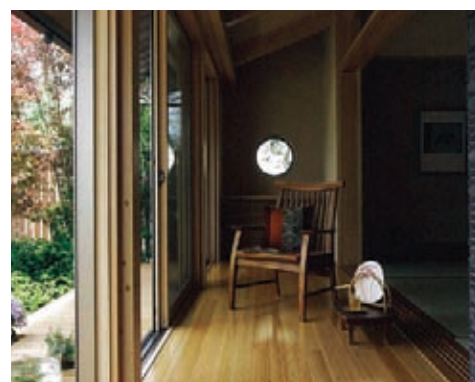
縁側

えんがわ

縁側とは戸外と主室の間に設けられた板敷の廊下状の空間で、主室に至る動線や主室の補助スペースとして利用されます。濡れ縁と違い、縁側は室内空間です。



伝統的な民家における部屋から庭につながるあいだの落ち着きのある縁側



最近の住宅における和室前面の縁側（写真：②）

内部空間

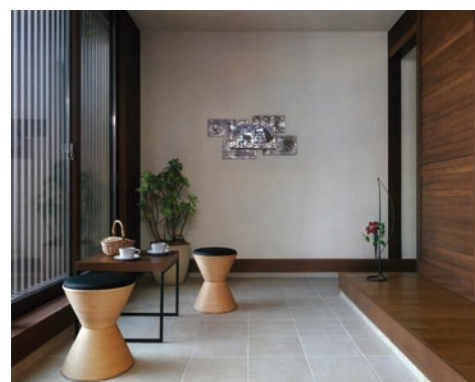
玄関

げんかん

住宅の主要な入口を言います。現代の住宅では、最小限のものが一般的ですが、収納やちょっとした接客スペースを設けるなどの工夫も増えています。



畳敷きの玄関。座って来訪者を迎えることができるしつらえ（写真：⑧）



ちょっと坐れるおしゃべりスペースを確保した玄関（写真：④）

開口部 雨戸

あまど

開口部を風雨から守るために、開口の外側に設けられた板引戸を言います。最近ではシャッターや可動ルーバーが組み込まれた製品もあります。



伝統的な民家における板戸の雨戸



可変ルーバータイプの雨戸（写真：⑨）

内部建具 襖

ふすま

木の骨組に紙を下地貼りし、表面を紙または布とした建具を言います。襖紙、下地、縁、引手に様々な種類があります。



引込み形式の襖（写真：①）



現代の住まいにとり入れられる襖（写真：⑩）

内部建具 引戸

ひきど

水平方向にスライドさせて開閉する建具を総称して引戸と言います。片引き・引違い、面材・格子など、形式や仕様は様々です。



伝統的な民家における間仕切り板戸の引戸（写真：①）

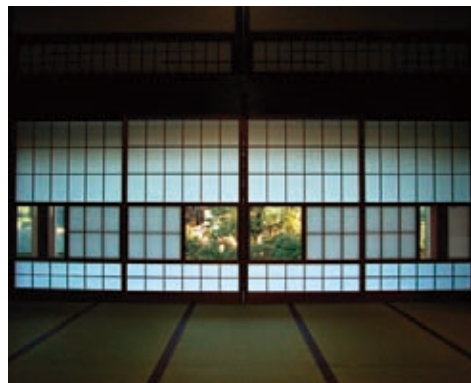


室内の通風のために上部に無双（2枚の板を左右に移動させて開閉する戸）を組み込んだ内部建具（写真：①）

内部建具 障子

しょうじ

木枠（組子）に紙を張った建具を言います。木枠の組み方やプロポジションによって、和風から洋風まで様々な趣を感じさせることができます。



細やかに視線を制御する雪見障子（猫間障子）



洋風のインテリアに障子をマッチさせた例（写真：①）

外壁

掃き出し窓

はきだしまど

掃き出し窓は、床面の位置から内法（鴨居）レベルまで開いている窓を言います。各室が外部から出入りでき、引違いや引込み等の開口形式があります。



伝統的な民家における屋外と室内の一体性を高める掃き出し窓



引込み形式の掃き出し窓を全面開放して、リビングと外部デッキ・庭との連続性を高める（写真：①）

外壁

窓庇

まどびさし

窓の上に取り付ける庇を言います。直上に屋根がない場合、軒やけらばの出が小さかったり距離がある場合に、雨水対策や日射遮蔽に有効です。



妻壁の開口部に設けられた窓庇（写真：①）



上部に軒庇のない掃き出し窓に取り付けた庇（写真：⑨）

開口部

日除け

ひよけ

(すだれ・よしず)

すだれ（簾）とは、よし（葦）や細い竹を、糸や細い縄で編み連ねたもので、窓の外や軒先に垂らして日射を遮蔽できます。



軒先に吊るされたすだれ。軒先から少し内側に設けたほうが耐久性は向上する（写真：⑦）



窓庇の先端に、すだれを吊るするためのフックが取り付けられている（写真：②）

開口部

格子

こうし

細い角材を縦若しくは横、縦横に隙間を開けて組み、建物本体や建具に取り付けます。視線・通風・明るさなどを制御します。



伝統的な京町家で通りからの視線制御を主に意識している



格子戸を締め切ると、風を通しつつ中からは見え、外からは見えない。まぶしさも緩和（写真：①）

外壁

板壁

いたかべ

板張りの壁（板壁）は、元々は外壁の塗装面を風雨から保護する目的で用いられてきた外壁仕上げです。下見張り、縦羽目張りなどの工法があります。



外壁の上部は漆喰壁とし、雨掛りの多い腰壁を板張りとした例（写真：①）



板壁を部分的に張り替えた後に塗装を施す。補修箇所が目立たず全体が馴染む（新潟・和島）

外壁

漆喰壁

しっくいかべ

漆喰は、土壁の上塗りなどに使われる水酸化カルシウム（消石灰）を主成分とした建材です。外壁だけでなく、内壁にも使えます。



伝統的な民家の漆喰壁



左官職人の手仕事による風合いのある内部の漆喰壁（写真：⑥）

開口部

高窓・天窓

たかまど・てんまど

高窓は、外壁の上部に設ける窓を言い、天窓は天井面に設ける窓を言います。採光や排熱・通風に効果があります。



伝統的な町家の土間の採光と換気を確保する高窓と天窓



通常の天井高さで内法の上部分が開口となっている高窓の例（写真：④）

開口部

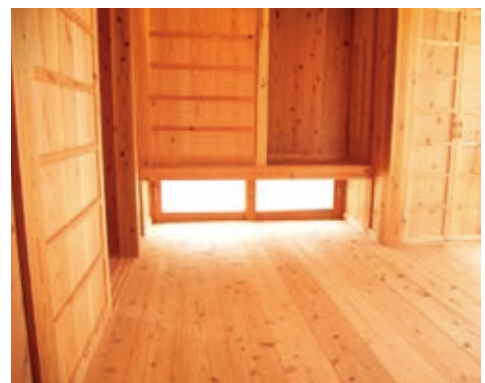
地窓

じまど

地窓は、床面に接して設ける外壁の窓のうち、高さが低いものを言います。採光や換気、戸外の観賞の機能ももちます。



伝統的な町家中庭に面した開口



収納下部に設けた換気に配慮した地窓

屋根・軒

勾配屋根

こうばいやね

雨の多い日本では、屋根に降った雨水を速やかに排水できるように、勾配のある屋根が発達してきました。



勾配屋根は雨水を早期に排水し、屋根の防水性を向上(大分)



雪割棟を設け、金属葺きとして屋根雪を自然に落とす。山並みに調和(富山)

屋根・軒

瓦屋根

かわらやね

日本の瓦の歴史は古く飛鳥時代までさかのぼります。瓦は日本の気候風土に適し、耐久性と美観を兼ね備えた屋根材料と言えます。



瓦の美しい屋根並み(富山・八尾)



地域産赤瓦による地域固有の景観(鳥根・石見)

屋根・軒

越屋根

こしやね

越屋根とは、元々は囲炉裏やかまどの煙出しなどのため、屋根の上に一段高く設けた小屋根を言い、現代の住宅にも上手く取り入れられています。



美しい景観を創出する越屋根(写真:①)



越屋根の頂側窓からそそぐ柔らかい光(写真:①)

屋根・軒

深い軒

ふかいのき

降雨から外壁を保護し、夏の日射を遮蔽できるように、屋根の軒を深く出す建築様式が発達してきました。



屋根を軒・けらば共に外壁から大きく張り出し、外壁を保護し雨の掛かりにくい外部空間をつくる(山形)(写真:⑥)



深い軒による陰影のある美しい外観(熊本・水俣エコハウス)(写真:⑦)

和を楽しむ

和の知恵を生かす

和の文化を伝える

和の心を育む

日本の住まいの知恵

日本の住まいの要素

現代における4つの「住まいづくりの目的」を達成するためには、建物の形式、材料・構法、空間構成などの要素（ハード面）と、住まいを維持・管理し活用する方法（ソフト面）の両方を上手く用いなければならないでしょう。

手引きでは、このうちハード面の「日本の住まいの要素」を36種類取り上げ、その概要と事例を紹介します。事例は、住まいづくりに参考になりそうな手法・技法を、伝統的な住

まいと現代の住まいから広く取り上げます。

下の図は「日本の住まいの要素」と「住まいづくりの目的」の関係を表しています。住まいづくりで重視しようとする目的を実現するためには、関係が深い要素を採用することが有効になるでしょう。

ご意向や条件に応じて採用できそうな要素を探すヒントにしてください。

「日本の住まいの要素」と「住まいづくりの目的」の関係

		住まいづくりの目的							
		人と人の関係を守り育てる		日々の暮らしを享受する		心地よく環境にやさしい生活を支える		外的環境から建物を保護する	
		人を迎え入れ集う	家族が見守り合い、成長する	暮らしのなかで、楽しみや豊かさを味わう	自然の変化やその風合いを感じとる	夏の快適、涼やかな生活に寄与する	冬の快適、あたたかな生活に寄与する	家をいためる自然の力を和らげる	
日本の住まいの要素	屋根・軒	勾配屋根							
		瓦屋根							
		越屋根							
		深い軒							
	外壁	板壁							
		漆喰壁							
	開口部	高窓・天窓							
		地窓							
		掃き出し窓							
		窓庇							
		日除け すだれ・よしず							
		格子							
		雨戸							
	内部建具	襖							
		引戸							
		障子							
		欄間							
	内部空間	続き間							
		縁側							
		玄関							
	ゆか	吹抜け							
		畳 和室							
		板の間							
	内部意匠	土間							
		真壁							
	装い	大黒柱							
		床の間							
	素材	仏壇・神棚							
		囲炉裏							
	戸外	土壁							
		自然素材・地域産材							
		濡れ縁							
	配置	坪庭・中庭							
		植栽							
			前庭						
			建物配置						

目的と要素の関係 強い 弱い

☞ 勾配屋根 瓦屋根 深い軒
板壁 漆喰壁 窓庇
雨戸 植栽 建物配置

湿気から建物を守る

台風の常襲地や季節風の強い地域などでは、建物周囲に樹木を配するなど、「植栽」により風や雨の影響を緩和する工夫もみられます。東北の「イグネ」、富山県砺波地方の「カイニヨ」などの屋敷林などの例があります。

これらに掲げる知恵や工夫に共通するのは、自然の大きな力に対して謙虚に向き合い、逆らわず、無理をせず、力を和らげる考え方です。建築技術や材料が発達した現代でも十分に有効な方法であり、積極的に取り入れることが望まれます。

高温多湿なわが国では、主体構造の土台・柱・梁などの木材を腐らせないようにすることが、重視されてきました。

「真壁」は構造の柱や梁を表に見せて、その内法を壁仕上げとする構法です。構造材が常に空気に触れているので乾燥しやすく、耐久性に優れ、改修もしやすい工法です。換気性能の高い床下や小屋のつくりは、床組や小屋組の木材の乾燥に効果があります。また、「高窓」は室内で暖められた空気の排出に有効です。「畳」(伝統的な製法による稲わら畳床)に用いられるい草・稲わらや内壁仕上げの左官材料の多くは吸放湿性が高く、室内の湿気や水分を吸収・放出するので、結露防止などの効果が得られます。



越屋根に設けた開口を開放して、暖められた室内空気を排出する (写真：①)



小屋裏現して天井を高く開放的にし、室内の空気循環をうながす (写真：⑥)



敷地周囲の生垣により強風から建物を守る (鹿児島)



外壁を流れる水を切る水切り瓦 (高知)



畳、漆喰塗などの自然素材を利用し、吸放湿性を高める (写真：①)

[住まいづくりの目的] 外的環境から建物を保護する

家をいためる自然の力を和らげる

風雨から建物を守る

年間降水量が世界平均の2倍で、台風の襲来が多いわが国では、強風や強雨、多雨から建物を守る工夫が古くから講じられてきました。

雨の影響を最も受ける屋根は、「勾配屋根」とし、「深い軒」を出すことが重要です。勾配屋根は、雨水を速やかに建物の外に排水するための合理的な形態です。軒は、雨を外壁面に当たりにくくして建物を雨から守ります。屋根を葺く「瓦」は、紫外線などにも強い耐久性の高い材料であることに加え、瓦の裏面に空気層があることで、雨水や湿

気が入った場合でも、その排水や乾燥をうながします。

外壁には、雨掛かりの影響を小さくするために、土壁の外側に「板壁」を設ける、防水性の高い「漆喰壁」とするなど、土壁を保護する工夫が一般的に行われました。雨の多い高知などで見られる外壁の水切り瓦は、壁を伝う雨水をこまめに切ることで、外壁に影響する雨水の量を軽減する工夫です。

開口部からの雨水浸入を防止する対策も重要で、「窓庇」や「雨戸」を設けることも効果があります。



妻壁の窓に付属する窓庇。開口部を雨から守るとともに、日射遮蔽の機能ももつ（写真：①）



富山・砺波平野の防風機能を備えた屋敷林



通風機能を備えた雨戸。ルーバーは可動し、通風・採光・視線を制御する（写真：⑨）



耐久性の高い瓦の勾配屋根。降雨を建物の外に速やかに排水する



土壁を保護する下見板を付加した外壁。雨掛かりの影響を軽減する

日射熱を集め蓄えて暖かくする

☞ 掃き出し窓 土間 土壁
自然素材・地域産材

冬に太陽からの日射量が多い地域では、日中の太陽熱を室内に取り入れて暖房の効果を得ることができます。暖房効果は、太陽熱を室内に多く取り入れて（集熱）、熱を蓄えて夜間などに持ち越す（蓄熱）ことで得られますが、屋根・壁・床や開口部などの断熱性を高めて熱が室内から外に逃げないようにすることが必要です。

かつての日本の住まいから、このうち集熱と蓄熱に効果のある手法を見出すことができます。

「掃き出し窓」などの大きな開口を設ける住宅のつくりは、集熱に適しています。「掃き出し窓」を南面に連続し

て設けることにより、集熱の効果が上がります。窓の上にある程度深い軒があっても、冬期は太陽高度が低いので、集熱が損なわれることは少ないと言えます。

蓄熱の効果を得るためには、土・石・陶器質タイル・瓦・漆喰など、熱容量が大きな材料を室内に用いることが必要です。「土壁」を外周壁や間仕切り壁に用い、漆喰塗り仕上げなどとすることも蓄熱効果を高めるために有効です。また、「土間」は熱容量が大きな材料を用いやすい床です。南玄関の土間床を大きく取りリビングにつなぐプランなども考えられます。



南面の連続する掃き出し窓と窓際の土間。大きな開口は太陽熱を取得する効果が高い（写真：②）



土壁や漆喰塗り仕上げの壁装。風合いがよいことに加え、土壁は蓄熱にも効果がある（写真：①）



南面の掃き出し窓と窓際の土間。土間床のコンクリートなどは蓄熱性が高い



南面の連続する掃き出し窓と石張りの床。石やタイルなどは蓄熱性が高い（写真：②）

冬の快適、あたたかな生活に寄与する

熱移動を調節し寒さを緩和する

☞ 縁側 雨戸 障子

住宅の断熱性をできるだけ高めて、冬に室内から外に熱が逃げないようにすることは、あたたかく暖房エネルギー消費の少ない住宅づくりを目指すときの基本となる考え方のひとつです。かつての日本の住まいは、断熱性の面では劣っていましたが、室内と屋外の境界部分に、断熱性の向上に寄与しうる要素が幾つか使われていました。

「縁側」は主室と戸外の間に設けられた幅3尺から6尺程度の板の間で、縁側と和室の間は通常障子で仕切られて、熱的な緩衝空間として機能しています。主室を直接外面させず縁側を設けることにより、厳しい戸外環境の影響を小さくし、主室の環境を保つ効果が期待されます。現代のサ

ンルームなどは環境調整空間の新しい形と言えます。

また、雨戸、網戸、ガラス戸や障子といった様々な外部建具を組み合わせて、季節や地域の気候特性に応じて使い分けることも大切です。戸外の寒暖、風雨、昼夜などの変化に応じて、住まい手自らが開放・閉鎖を使い分け、室内環境の維持・形成に役立てることができます。「雨戸」は風雨から開口部を守ることで、防犯、遮音、断熱にも役立てることができます。冬の戸外の寒さに対しては、戸の素材や戸と枠の取り合いなどを工夫することにより、断熱性を高めて寒さを和らげることも可能です。



縁側は部屋と屋外の緩衝空間となり、熱の移動を調節する (写真: ②)



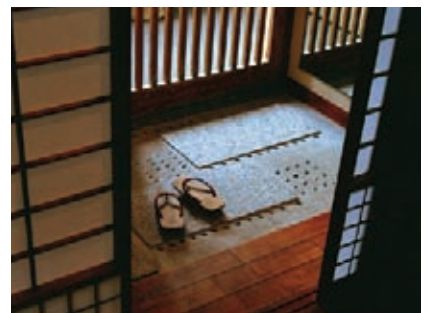
外から雨戸、網戸、ガラス戸と障子を複合。季節や気候特性に応じて様々な建具を組み合わせることが大切 (写真: ⑦)



縁側の熱調節機能を高めるために、縁側と戸外、主室のあいだの建具のつくりを工夫する (写真: ④)



伝統的な民家の雨戸。風雨から開口部を守る戸であるが、防犯、遮音、断熱の機能をもち得る



集合住宅の居室とバルコニーのあいだに土間風の中間領域を設け、建具で仕切り熱の移動を調節 (写真: ①)

日射を遮り室内への流入を抑える

☞ 深い軒 日除け(すだれ・よしず)
窓庇 障子 植栽

夏や春・秋の暑い日に、住宅内への太陽熱の過度な流入を抑制し、冷房に頼らないでも心地よい室内環境を保つために、とくに日射遮蔽は重要となります。

日本の住まいに古くから用いられた「深い軒」は、太陽高度が高くなる南からの日射を遮るのにとくに効果があります。また、太陽高度の低い西・東からの日射を遮るためには、窓の内外に遮蔽物を設けることが有効です。最近では室内にカーテンやブラインドなどがよく設けられますが、窓の外側に設置する方が日射を遮る効果は高く、古くからの「すだれ・よしず」はとて有効です。安価で取り扱いも簡便なので、窓庇や軒裏などに取付け用のフックを

設けるとよいでしょう。これらは日射を取り入れたい冬などには、取り外しできます。最近の外付けのブラインドなども、「すだれ」同様、遮蔽効果の高い建材です。

建物周囲の「植栽」に気を配ることも大切です。落葉樹を窓の位置と方位を意識して植樹する、照り返しを抑制するために建物に近い地表面を芝や土で覆うことなども、日射を遮る工夫の一例です。

また、屋根や外壁は、日射により温度が上がると室内側への放熱が生じるので、それを抑制するために、瓦や板壁を用いた場合でも下地に断熱層、通気層を設ける対策を講じることが望まれます。



室内にすだれを吊るし、日射の流入を抑制。見た目にも涼感と風情が感じられる (写真：①)



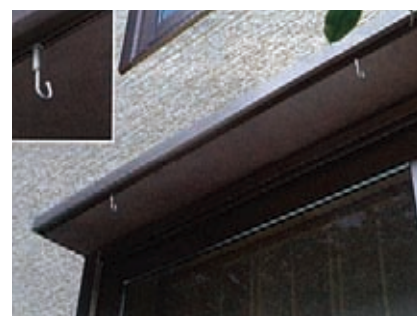
軒庇による日射遮蔽。太陽高度の高い南面では単独で使える手法 (写真：②)



紙障子で日射を遮るとともに視線を制御する



軒先から吊るした紐につる性植物を這わせた緑のカーテン (写真：⑦)



窓庇の先にフック状の金物を取り付け、すだれなどを設けられるようにする (写真：⑧)